早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第四十八号抜刷
（平成二十四年三月二十五日　発行）

ジャーナリストの戦場と「女」

――ニコラス・ボルン『捏造』と開高健『輝ける闇』『夏の闇』

杵　渕　博　樹

ジャーナリストの戦場と「女」

――ニコラス・ボルン『捏造』と開高健『輝ける闇』『夏の闇』

杵渕博樹

序

ニコラス・ボルンの『捏造』(一九七九)(1)は、レバノン内戦を取材するドイツ人ジャーナリストを描き、開高健の『輝ける闇』(一九六八)(2)はベトナム戦争を取材する作家自身を思わせる人物を語り手兼主人公に据えている。両作品はともに、実際に戦場に赴いた体験を下敷きにしており(3)、戦争取材を主要テーマとしているが、その一方で、物語の展開においては、主人公の現地の愛人との交渉が重要な位置を占める。開高の『夏の闇』(一九七二)(4)は、ベトナムから戻った作家を主人公とし、『輝ける闇』のあとを受けているが、そこでは、戦争は背景に退くものの、戦争取材の体験が主人公にもたらした影響が作品全体を影のように覆い、ひとりの女性との経緯を追う物語展開の細部に浸透している。

本論考では、この、戦場のジャーナリストたる主人公男性たちと取材現地の女性との関係を比較し、それよって得られる眺めを踏まえて、それぞれの作品における、主要テーマへのアプローチの特性に考察を加える。その際、ボルンの『捏造』と開高の『輝ける闇』の二作品を中心に論じ、必要に応じて『夏の闇』を参照する。

作品概要

ボルンの『捏造』の主人公である雑誌記者、ゲオルク・ラッシェンは、内戦下のレバノンに派遣される。自らも市街戦に巻き込まれつつ、混沌とした戦況を取材し、日常と隣り合わせの殺戮を目の当たりにしながら、彼は、自分たちの提供する情報が、興味本位で消費される商品と化して

いく現実に疑問を感じている。彼には妻と幼い娘があるが、写真家であるこの妻もまた多忙で、すれ違いがちな彼らの家庭は崩壊の危機に瀕している。妻には愛人がおり、ラッシェンもまたベイルートのドイツ領事館に勤務するドイツ人女性アリアーネと懇意になる。彼女は現地の男性と結婚していたが今は未亡人で、ラッシェンと関係を持つ。彼は妻との離婚と中東への定住を決意するが、アリアーネは別のアラブ人男性を選び、ラッシェンを拒絶する。それを受けてラッシェンは帰国し、妻子のもとへ戻るが、関係改善の兆しは見えない。

開高の『輝ける闇』の主人公作家は、従軍記者として南ベトナム軍に同行する。サイゴンには若く美しい愛人がいる。キャバレの踊り子、トーガである。前線の取材から戻ると、主人公は連日、店のマダムに金を払ってトーガを連れ出し、食事をし、セックスにふけるが、彼はベトナム語を解さず、この愛人は日本語も英語もしゃべらないので、言葉は通じない。やがて主人公は再び戦場取材に向かい、激烈な戦闘に巻き込まれる。

『夏の闇』は『輝ける闇』の続編の趣を持つ。ベトナム取材を終えた主人公作家は、ヨーロッパで若い愛人に再会する。この、主人公同様名指されることなく、ただ「女」とだけ称される愛人は、日本に居場所を失い、ヨーロッパを転々としながら苦学し、博士の学位論文の提出を間近に控えている。ふたりは美食とセックスに明け暮れ、主人公は女の部屋にこもったきり、ほとんど外出すらしない。しかし、いつかそんな生活も行き詰まり、作家は再度ベトナムの戦場に向かう。

それぞれの主人公における戦争

『捏造』の主人公ラッシェンにとって、レバノンで目撃し、体験する戦争は、未知のものである。そもそも、戦争の行われている土地、それに係わっている人間たちそのものが彼にとっては異質の存在である。すなわち、アラブの土地、アラブ人たちは、彼にとって余りにも遠く、彼らの生活感覚や文化に対する自然な共感は存在しない(5)。他方、その遠さと隔たりにも係わらず、彼は、この悲惨な内戦をただ観察する自分の立場を倫理的に容認できない。彼は自分の仕事のうちに、より多くを見ようとするための「盲目」、より多くを感じるための「麻痺」、考え抜くための「狂気」を見出す(F 160-161)。そのようにして生み出される戦争報道は、彼にとって「捏造」だった。

そして彼は「捏造」的でない記事を書けたと自負する場面でも、それが偶然の産物であり、そのような記事だけを書き続けることが不可能であることを自覚していた(F

219)。そうである以上、そのような記事の実現は、ジャーナリスト個人の倫理的アリバイにはなるかもしれないが、それによって、戦争報道を巡る需要と供給の欺瞞的システム全体を修正することはできないだろう。彼にとって、この出口のない葛藤に劇的な解決をもたらすかもしれない方法が、自らが当事者になること、すなわち〈アラブ人になる〉ことであった。この発想は、ドイツからやってきて現地人男性と結婚し、この男性の死後も現地にとどまっているアリアーネが提示することによって、少なくとも見かけ上は、現実的な説得力を持つ(6)。ドイツ人であった彼女が実際に〈アラブ人になっている〉のである。

他方、『輝ける闇』の主人公にとって、ベトナムで見る光景は、自らが少年時代を過ごした日本の敗戦前後の情景に重なり合う。炎天下、いつ爆弾が落ちてくるかも知れぬ池の畔に群がって祈る貧しいひとびとのあいだには、「二〇年前の母や私が何人となく見つけられそうだった」(K 26)。路地裏には難民たちの群がうずくまり(K 166)、ときに日本の戦時中の流行歌が聞こえてくる(K 107)。サイゴンは、主人公に当時の大阪を彷彿とさせるのである。かつて幼い彼は機銃掃射を受けて九死に一生を得ており(K 206-207)、戦後は道端で多くの人間が餓死しているのを目撃し、自らも飢えながら餓死におびえていた(K 208)。

ベトナムの戦場でもまた多くの死と死体を目撃し、公開処刑にはショックを受けるが(K 157-167)(7)、彼にはこの激しい生と死のコントラストに見覚えがある。「投光器の光芒を浴びた深夜の地雷原の荒涼」は、「少年時代に私が腐へ刷り込んだ焼跡にそっくり」なのである(K 230)。

つまり、彼にとっては、〈戦争〉自体が完全に未知のものではなく、今問題になっている戦争の現場であるベトナムも、当地のひとびとも、自分と異質なものとは感じられない。そもそも日本人にとって、水田の広がるアジアの仏教国であるベトナムは、ドイツ人にとってのアラブよりもはるかに〈近い〉。この点は『捏造』の場合と大きく異なる。『輝ける闇』の主人公にとって、ベトナムのひとびと一般への共感は、既に実現しているのであり、その点に限って言えば、わざわざ〈ベトナム人になる〉必要はない。つまり、当事者化へのひとつのステップ、あるいはその前提としての当事者たちへの接近は、すでにある程度実現しているのである(8)。

だが、『捏造』に描かれた、陣営を問わず、誰もが敵に対する差別意識や憎悪を動機として銃を取っているように見え、昨日までの民間人が今日、自発的に兵士となっているかのように見える内戦と異なり、ベトナム戦争は、少なくとも形式的には、思想と思想、国家と国家、軍と軍との

間の戦いであった。また、南ベトナム軍は厳しい徴兵によってかき集められた集団に過ぎなかった。これを背景とする『輝ける闇』の場合、傍観者たることへの後ろめたさをいわば道義的動機として現地の人間になる試み、あえて戦争に巻き込まれ、これに参加するという試みには、『捏造』の場合以上に現実味が乏しい。『輝ける闇』の主人公にとって、現場で感じるベトナム戦争は、即座に彼自身にとって非常に近い出来事となり、また、現地で出会う当事者たるベトナム人たちは彼自らの同胞、すなわち日本人とよく似ているために生々しい共感の対象となる。しかし、そこで進行する事態への直接的介入はまったく問題にならない。それだけに、彼らとの間に厳然として存在する隔たりは見逃しようもなく、それを乗り越えること、言い換えれば、当事者となることの困難、あるいは不可能性もまた、より明白なものとなっている。

当初、『捏造』におけるラッシェンの当事者化は、武器を取ることを前提にしてはいなかった。それが平時であれば、アリアーネとの生活を選択して現地に留まり、ドイツおよびドイツに残してきた妻子と決別することで、彼もまた〈アラブ人になる〉ことができたかもしれない。ところが、アリアーネを巡るライバルが銃を携行しているのを目撃したとき、彼はもうひとつの条件に直面する(9)。この内戦下のベイルートで〈アラブ人になる〉ためには、武器をとって、殺戮の応酬に加わらねばならないのである。

母国への帰属とその忌避

『捏造』のアリアーネは〈ドイツ〉を捨て、〈ドイツ人〉であることをやめた。『輝ける闇』のトーガは、そもそもベトナムにいるベトナム人であり、母国を捨てる契機を持たない。では、『夏の闇』のヒロインである日本人女性はどうか。

彼女は故国日本に自分の場所を見出せず、長くヨーロッパに滞在して博士論文を執筆しており、二度と日本へは帰らないつもりでいる（N 315-316）。そこへ、かつて東京で愛人としての親密な関係を持っていた男、すなわち開高の分身たる「私」がやってくる。すなわち、日本への深い恨みと違和感にもかかわらず、日本人男性と再び接近することになるのだが、この人物から、日本との本質的決別の困難を当然のことのように指摘され、彼女は反論することもできず、愕然とする（N 428-429）。語り手「私」によれば、どれほど日本を憎んでも、まさにその「憎悪という情熱」を原動力とした「復仇」が果たされたとき、その憎悪も消えるのであり、「酔えなくなったら生きていくのはつらい」ものだという。もはや母国との葛藤は問題にならない。こうして彼女の脱日本闘争は、戦意喪失の予感のもとで行き詰まる(10)。

この感覚は、やはり本来自らの属していた社会において疎外され、外国へ向かったアリアーネの場合とは対照的である。アリアーネは、この世の終わりが近いことを強調する宗派、新使徒教会（New Apostolic Church）の熱心な信者だった家族と訣別し、十八歳で教会をやめる、という仕方で、キリスト教文化圏としてのヨーロッパからの象徴的離脱を経験している（F 77-78）。また、図らずも黒い肌の赤ん坊を養子に迎える経緯は、人種的帰属をも殊更に相対化している（F 153-154）。さらに、アラブ人の夫に先立たれたあと、ラッシェンを拒み、再び現地の男性を選ぶことで、ドイツおよびヨーロッパへの再接近を回避している。彼女は、少なくとも主観的には、そして当人にとっては一定の満足を得られる仕方でもって、当初の国家的・民族的・文化的帰属を乗り越えているのである。そして、ラッシェンは彼女のそのような選択を本質的なものと捉え、結果的には挫折するものの、彼なりの仕方でそれに倣おうとする。

このような、それぞれのヒロインの母国との関係のあり方、あるいはネガティブな関係の克服の可否と、それに対するそれぞれの主人公男性の態度の相違は、両作品の〈戦争〉というテーマへのアプローチそのものに対応するものであると言える。『捏造』は、戦争報道、すなわちジャーナリズムの功罪に焦点を当てた段階で、人類が戦争をどう克服するべきかという原理的かつ普遍的問題に不可避的に係わっている。特定の民族的・文化的グループへの絶対的帰属は、戦争の大前提である。その相対化は、ここでは象徴的な意味を持つ。他方、『輝ける闇』は戦争報道の現場を作品の舞台にしながらも、ジャーナリズムそのものの問題には深入りせず、主人公である作家の私的葛藤を集中的に描きつつ、この人物の見た戦争を、抵抗しようのないものとして扱っている。なおかつ、そこでは民族的・文化的帰属は自明のものとして現れる。後者の絶望が真理であるなら、前者の希望は浅薄な欺瞞であり、前者の苦闘が倫理的正当性を持つなら、後者の宿命論はニヒリズムである。

現地の女性との関係

『捏造』において、ラッシェンのアリアーネとの関係は、戦争に対する彼の当事者化の試みの一環であり、また、コミュニケーションと認識における一般的な自己変革の契機である。また、この作品では、妻子に関する記述の全体に占める割合の大きさが顕著である(11)。妻との関係がすでに危機に瀕していることとも関係があるが、主人公にとっ

て、妻は欲望と愛着の対象であり、飽くまでも〈他者〉である。数日間の留守のあとの妻の帰宅に際して、彼女が「どこで何をしてきたのかわからないことに彼は興奮し」、「まさにそのことで彼女への興味がわき、いつもわけのわからない欲望がかきたてられる」という（F 15）。

ラッシェンにとっての妻は、自分に付随し、所属するような自明の存在ではない。だからこそ、彼女との関係が問われるとき、そこでは当然のようにこれに対する自分の態度が問題にされるのだが、その態度に見られる基本姿勢は、ジャーナリストとしての自分の態度に共通するものとして扱われる。彼は自分の素直な気持ちを妻に伝えることができない。相手の気持ちを先に感じ取ってしまうからだ（F 94）。親密な関係においても、結果的に自分の感情を隠してしまうような彼の秘密主義的な姿勢は、妻と相対するときばかりではなく、アリアーネを前にしても変わらない[12]。

感じやすい人間は、感じすぎてしまうことを避け、身を守るために傍観者としてのふるまいを覚える。それはある面ではジャーナリストにふさわしい特性だが、別の面では問題ともなりうる。ラッシェンは自分について、「子供のころからどれほど感じやすい人間だったとしても、だからこそ報告者としてのおまえは感受性を欠くモンスターになってしまったのではないか」と述べている（F 186）。

ただし、このように、対人関係における自分自身のあり方が全編を通して模索されているにも係わらず、主人公はそれとの対峙あるいはその克服を目的としてレバノンに来たわけではない。彼は飽くまでもジャーナリストとして、より「捏造」的でない報道を行うためにやってきたのであり、妻子やアリアーネとの関係の問題は、記事の執筆を巡る葛藤と並行して取り扱われている。こうして、それらは相互に影響を与え合いながら進行し、物語展開において表裏一体の関係をなすことになる。

これに対し、『輝ける闇』の主人公のサイゴンでの愛人トーガに対する関係は、ラッシェンのアリアーネとの関係の場合同様、作品全体に対して分量的にも内容的にも相当な比重を持つが、濃厚かつ執拗な性愛描写の繰り返しにも係わらず、また、それによってもたらされる体験としての確かさの印象にも係わらず、（語り手によれば）互いに何の変化ももたらさない。この開高の分身は、再度前線へ赴くに際して、「今度も」愛人には何も告げずに去ろうと考える。そして、言葉の通じない自分たちは、「道のうえで出会った二匹の昆虫」のように、わずかな語彙を「触手のように扱ってまさぐりあってきた」のであり、ともに過ごした時間は「獣のように純潔で、深く、精妙であり、習慣

の腐臭が」なかったのだという。彼は「森や渚のある孤島」としての彼女に「上陸して森のふちを散歩したけれど、何も変えなかった。変えられもせず、変えようとも思わなかった」（K 223）。この点は、『捏造』の場合とは対照的である。この愛人関係に対する自己評価は、ベトナムで何を体験し、何を見聞しようとも、自分自身は本質的に変わらないだろうという予感、あるいは変わるまいとする意思を暗示している[13]。

ここで狭義でのセクシャリティを殊更に強調された愛人関係は、禁欲的で生命を危険にさらす従軍生活との対比において、自堕落な快楽主義的生活として偽悪的自己表現の中核をなす。そこでは、相互に人格として尊重した上での人間関係はそもそも問題にはならないので、『捏造』におけるラッシェンの場合のような、自己の日常的対人関係のあり方が批判的に問い直される契機は存在しない[14]。

また、妻子に関するごくわずかな言及は、仮にそのような記述が皆無であった場合以上に、主人公における自らの家庭に対する無関心ぶりを強調していると言える[15]。彼にとって「妻子」はもはや余りにも自明なもの、自分自身の一部なのである[16]。彼は自身の日常のもたらす焦燥から逃れるために、あえてみずからの生命を危険にさらすが、そのことが彼の家族にとってなにを意味するかを問うことはしない[17]。

彼が世界に対して下す評価は、トーガやその兄との交渉によってもほとんど変化しない。一過性の感傷的な動揺が観察されるだけだ[18]。ラッシェンがアリアーネの態度によって世界観そのもの、世界との係わり方そのものに変更を迫られていたのに対し、『輝ける闇』の主人公にとって、自分が世界と向き合う態度は、ほかに選択肢の存在しない絶対的なものなのである。

取材対象との関係のアナロジーとしての愛人関係

この主人公たちのそれぞれの愛人との関係は、取材対象としての戦争との関係のアナロジーである。ラッシェンは、単なる情事だけでは満足せず、対等の人格としての、純然たる〈他者〉であるにも係わらず（あるいはだからこそ）相互理解を試みるべき対象としての女性と向き合い、〈男〉として、共に生きるパートナーとして認められることを求める。また、アリアーネは顔に傷跡があり、一般的な意味での外見上の魅力を、設定上、相対化されている（F 34, 92, 249, 277）。この点は、その彼女にラッシェンが特別な執着を見せる以上、彼女の存在における内面の個性を特に強調していると言える。この傷は、彼女の心が抱える傷を暗示しつつ、内戦によるレバノンあるいは〈アラ

ブ世界〉の負う傷をも象徴する。だとすれば、ここでは、彼女が〈ドイツ人〉である以上、その傷の痛みが、当地で生まれ育った人々ばかりではなく、他の場所から来た者にも感受されうるもの、共有されうるものであることもまた暗示されているのだ。

他方、『輝ける闇』の主人公は、あどけなさの残る少女のようなベトナム人女性と、言葉の通じぬままに、性交渉の次元では深く情熱的に結ばれ、あるいは、彼女の肉体を飽くことなく執拗に貪り、それでいて、その関係の結果として、お互いの存在にはなんの痕跡も残さない、とこともなげにうそぶく。また、「一日に双方とも平均一〇〇人」の戦死者と、路傍に花商人の並べる絢爛たる花々を対比させて、「熱帯は冷酷なまでの受胎力にみち、屍液も密も乱費して悔いることを知らない」、と嘆じてみせた余韻のうちに（K 74）、若く美しい愛人を樹木に喩え（K 75）、サイゴンの町の裏路地では「腐った道が絢爛たる熱をふくんで一週間も洗わなかった女陰のその匂いを立てる」と称する（K 220）。彼にとってベトナムは〈女〉であり、彼の愛人はベトナムそのものなのだ(19)。すさまじい荒廃を抱えつつ、にもかかわらず相変わらず美しい。〈そして言葉は通じない〉。繰り返される性描写は、主人公にとって、この愛人トーガの魅力の主要な部分が、そのより純粋なる性的欲望の対象としての個性、すなわち〈男〉の抱く幻想としての受動的な個性にあることを示唆している(20)。

『夏の闇』の主人公は、愛人のもとに転がり込むなり、外食目的以外には部屋から出ることもなく、ただ彼女の世話になり、セックスに明け暮れ、そのような自分を徹底的に観察したあと、また戦場へ戻ろうとする。「女」は動揺し、非難し、激しく憔悴するが(21)、男の主観においては、「女」のもとでの日々は、自分にとって単なる自堕落でしかない(22)。その生活によって、彼が本質的変化をとげることはなかったわけだが、それは変化を拒もうとする彼自身の心的態度の表出でもある(23)。彼は当初より、「女」との関係が所帯じみてくることを何よりも怖れていた。語り手は「女」と「部屋にいるときはいつでも全裸でいようと約束を」するが、それは「女がこの部屋に家の匂いをつけ、主婦のそぶりになじむことを私は恐れている」からであり、「一瞬でもそれをさきへひきのばし、遅らせ、避け」るためだ（N 375）(24)。彼は「家」と「主婦」を恐れ、惰性でない性欲の恒常的喚起を指向している。彼が必要としているのは、その契機として機能するものとしての「女」なのだ。この作品に多く見られる、ヒロインの肌、体格、肉付き、皮膚、性器などの細密な描写や蘊蓄の開陳、同様に詳細な性行為の様子の再現、それに対する主人公の評価の記

述もまた、ここで彼女が期待される役割に対応している(25)。そして、「女」が「主婦」と化してしまうと、それを潮時とばかりに語り手は再び戦地に赴くそぶりをみせるのである。

ボルンの『捏造』では、ラッシェンの相棒を務めるカメラマン、ホフマンが、女性関係における構えに関して、主人公と対置されている。ホフマンは、取材対象を〈よい写真〉におさめることで征服し、商品化するが、取材対象自体に対する執着も共感もなく、どのような場面に居合わせても、動揺や感動とは無縁で、常に平然としているように見える（F 22-23, 186）。被写体あるいは情景を、歴史的文脈や状況に左右されることなく、自分のなかにあらかじめ存在する〈よい絵〉の素材としてのみ、対象化しているのである。これはホフマンの女性に対する態度そのものである。すなわち、いつも「女」を必要としており、適当な相手がいれば部屋に誘うが、セックスの相手、性欲のはけ口以上のものは求めず、不要になれば捨てる(26)。

それに対し、ラッシェンは、このホフマンの捨てられた恋人とも一夜を共にしているが、これは、もともと知り合いであったこの女性の相談を受けての行きがかり上の出来事であったし（F 24）、ベイルートではアリアーネとも関係しているが、それはすでに半ば別居状態で愛人のいる妻との関係の破綻を前提にしており、少なくとも、性欲のはけ口として常に女性を必要としているという自覚はない。特に、すれ違いがちな夫婦関係については、それを何らかの形で解決すべきだと考えている(27)。このことは、妻を独立した別人格として扱っていることを意味する。

しかし、結局、アリアーネはラッシェンを選ばない（F 278-281）。これは、彼が取材対象としての〈アラブ世界〉によって拒絶されたこと、また、そこを自分の新しい居場所にすることができなかったことを象徴する。同時に「捏造」を排した報道の模索もまた挫折し、彼は失意のうちに帰国する。物語は帰国後も続き、ラッシェンは家族のもとへ戻るが、そこでは冷え切った夫婦関係があらためて描写される（F 310-316）。すなわち、親密な人間関係を巡る彼の葛藤は、職業上の葛藤と共に継続されるのである。

他方、『輝ける闇』の日本人作家が〈ベトナム〉によって拒絶されることはない。そして彼は『捏造』のラッシェンが問題にするような親密かつ対等な人間関係がありえないという前提のもとで、いわば、ベトナムという魅力的な〈女〉を欲しいままに一方的に味わいつくすのである。そして非「当事者」性、あるいは傍観者性に由来する後ろめたさを自覚しても、それを克服する無駄な努力はせず、ただ開き直り、自分は「視姦者」であるとの自虐的な断定で

葛藤を切り上げる(28)。

『輝ける闇』の場合、作品の幕切れもまた戦場である。つまり、彼は愛人に対するのと同様、戦争に対しても、これを部外者として、非当事者でしかありえない他者として、徹底的に見ようとし、体験しようとする姿勢を貫いているのだ。そこに苦痛が伴ったとしても、それは「当事者」たちの苦痛とはなんの関係もない。彼の論理に従えば、〈他者〉である以上、本質的共感は不可能だからだ。だからこそ、再び戦場に向かう彼は、それを「私のための戦争」(K 226)と称するのである。『夏の闇』の主人公が、この同じ戦争について「日本人の戦争であってほしかった」(N 517)と述べるのもまた、「当事者」たりえないことへの不満の表明である(29)。

このように、『捏造』と『輝ける闇』それぞれの主人公は、〈戦争〉と〈女性〉に向き合う姿勢が根本のレベルで一致している点が共通している。そして、『捏造』の主人公は、そのことを自覚しかつ重視しており、『輝ける闇』の主人公は、そのことをおそらくは知っているが、これに触れようとはしない。

戦争ジャーナリズムと文学

ここで取り上げた両作品は、戦争ジャーナリズムをテーマにしており、これらが小説であるという形式のみならず、内容的にも〈文学〉の問題が描かれている点が共通している。すなわち、『輝ける闇』の主人公は作家であり、『捏造』の主人公ラッシェンの「捏造」を巡る葛藤は、言語表現のあり方を問う、一種の文学論的性質を持っていた(30)。

ただし、それぞれにおけるこの〈文学〉の現れ方は異なっている。『輝ける闇』の主人公は、言語化の困難な状況に身を置き、それを体験した上で、あえてその言語化に挑戦しているわけだが、この作業の結実としての言語表現の一般的真実性は疑われていない。しかし、『捏造』の場合にラッシェンの求める言語表現の真実性は、まったく別の次元で争われている。ここでは、作品がテーマとし、設定上の枠組としたジャーナリズムが、文学を含む言語表現一般の問題を顕在化させるモデルとしての機能を果たしているのだ。すなわち、ジャーナリズムにおける非「捏造」的なる記述の実現という課題は、そのまま文学作品に当てはまるのではないかという問題提起である(31)。言語表現の限界は、道具としての言語そのものの本来的キャパシティの問題としてではなく、むしろ書き手のモラルの問題として扱われているのである。

また、『輝ける闇』における開高の分身は、サイゴンにいる間は身の危険を感じていない。彼のベトナムは、危険

な戦場と、安全なサイゴンとから構成されており、物語はそのふたつの場所の往還によって成立している。この帰れる場所の存在によって、開高の分身は観察者、傍観者、表現者としての定点を確保できる。また、戦場で南ベトナム軍に同行している以上、そこでの眺めにおいては、「南」の内部から外部としての「北」を見るという視線の角度と方向が明確であった。他方、ラッシェンの場合は、観察者としての相対的に安定した立場があらかじめ脅かされている。当時のベイルートでは各武装グループの勢力範囲が曖昧で、その一応の境界線を越えた攻撃が日常化していた。都市全体がゲリラ戦の舞台となっており、狙撃手は無差別に通行人を撃つ。比較的安全とされるホテルでさえ、突然攻撃を受ける。そのような状況下では、視線の起点としての自分のいる場所を特定することも、観察のために必要な距離を対象との間に確保することもできない。彼は、日常と化した戦闘に巻き込まれながら、自分の位置を測れないままに、自分の体験を言語化しなければならないのである。彼が自分の仕事に「捏造」を疑う契機のひとつがここにある。見通しの利かない場所、全体の構図の把握できない場所では、自分自身の位置の特定なくしては物事は語りえない。だとすれば、彼の当事者化への欲求は、そのような意味での自分の位置、非「捏造」的なる観察のための定点の確保への欲求でもあるのだ。

両作品はともに主人公たちを戦場へ送り、そこでの作者自身の体験をあえて文学の枠組において結実させるべく試みているが、情報がリアルタイムで国境を越えていく時代には、〈文学〉もまた、その遠くかつ速い情報のリアリティを独自の仕方で感じ取り、さらにはこれに即したスピードで批判的に取り扱うことができなければならないのかもしれない。その際、歴史記述でもジャーナリズムでもない虚構としての文学独自の積極的可能性は、おそらくは個別の主体における主観的・感覚的な真実としての世界の定着にある。ここで取り上げた作品の主人公たちは、みな、故国での日常に違和感を抱いていた。その違和感には、それぞれの生きる時代と社会の特徴が反映されており、それを彼ら自身ある程度対象化し、分析してはいるが、認識主体としての彼らにおいてこれに対応する切実な症状は、私的焦燥であり、実存的葛藤であった。すなわち高度に主観的な世界での現象である。これらの作品には、同時代の抱える矛盾が先鋭に現れる場所としての戦場を、いわばジャーナリスティックな仕方で直接描写する要素と、それを前にしたひとりの人間の反応を描写する要素とが含まれるが(32)、そこで、主人公男性たちの女性との親密な関係を追うエピソード群が集中的に担うのは、まさに彼らの私的かつ主観

的な現実である。これらの作品においては、この〈戦場の「女」〉のモチーフがひとつの基点となることによって、ジャーナリズム的な意味での客観的世界を背景にしつつ、これを成立させるカラクリをも意識化しようとする批判的主体における現実感覚を巡る葛藤の展開が、独自の文学的なる像を結んでいるのである。

注

(1) Born, Nicolas: Die Fälschung. Roman. Reinbek bei Hamburg 1979. Hier die Auflage 1993. 以下、引用および参照箇所指示に際しては、略号Fにページ数を添える。

(2) 使用テキスト:『開高健全集』第六巻(一九九二年、新潮社)。以下、引用および参照箇所指示に際しては、略号Kにページ数を添える。

(3) ボルンは、既にレバノンでの取材経験のあったジャーナリスト、カイ・ヘルマン Kai Hermann (1938-) の協力を得て、一九七七年、二ヶ月間のレバノン滞在を実現した。Vgl. Bosse, Heinrich, und Lampen, Ulrich A.: Das Hineinspringen in die Totschlägerreihe: Nicolas Borns Roman "Die Fälschung" München 1991. S.11. 開高は、一九六四年から六五年にかけて三ヶ月、朝日新聞の臨時海外特派員としてベトナムに渡っている。参照:秋山駿『解説』(新潮文庫版『輝ける闇』、一九八三年) P.291。開高健、柴田翔、高橋和巳、真継伸彦:書評「開高健著『輝ける闇』」(『人間として4』一九七〇年十二月) P.285。形式上、ボルンは作家として、開高は新聞記者として戦場へ向かったことになる。

(4) 使用テキスト:『開高健全集』第七巻(一九九二年、新潮社)。以下、引用および参照箇所指示に際しては、略号Nにページ数を添える。

(5) ラッシェンのベイルート取材は二度目であり、さらにそれ以前の中東取材経験も暗示されるが、「アラブ」は彼の理解を拒む異質の「世界」である。「アラブ世界。けっして彼はひとつの世界を知ることはなく、ただそれを訪問し、その都度数日間その外皮に留まった、それだけのことだった。」(F 18)

(6) ドイツ人であることへの違和感を口にするラッシェンに対し、アリアーネは「だったらアラブ人になれば、あたしみたいに」と挑発する。これにラッシェンは動揺する。(F 131)

(7) この公開処刑の目撃については、『輝ける闇』に先立つルポルタージュ『ベトナム戦記』で既に詳述され、遺作となった小説『珠玉』でも取り上げられている。参照:『ベトナム戦記』「ベトコン少年暁に死す」の項(『開高健全集』第十一巻。一九九二年、新潮社) P.94-104。『珠玉』(同第九巻) P.

352-353。

(8) ただし、語り手が示すこのベトナムのひとびとへの共感あるいは理解は、飽くまでも主観的なものであり、「異民族同士の理解しあえなさ」が「ほとんど昔かれていない」という真継伸彦の批判もまた正当なものと言える。作者は「あまりにもわかりすぎ」、「そのなんでもわかってしまうところが、かえって本当の理解」を遠ざけているのかもしれないのである。参照:「開高健著『輝ける闇』」(『人間として4』) P.290。

(9) ラッシェンは、そのアラブ人男性とアリアーネが別れ際に抱き合ってキスするのを目撃するが、その際、「ピストルを支えるその男の手の上に彼女が手をのせる」(F 248) のを見る。「彼女は武器を持つ手を愛撫していた」(F 250) のである。さらに、彼女が武器を持つこの男の手を愛撫する様を、ラッシェンは再度目にすることになる (F 288)。

(10) 末尾近くでも、『夏の闇』の語り手は民族的帰属への依存に言及する。「絶対的自由主義者であるらしいこの私がこの期に及んで血縁や地縁によりそいたがるのは失笑するしかないが、事実であった。」(N 517)

(11) この作品の主要部分(使用テキストの全三一一ページ中一七五ページ)は、主人公のベイルート渡航から帰国までの経緯を描いており、戦火のレバノンを舞台にしているが、その間、彼が妻に手紙を書く様子やその内容、また、彼の彼女を巡る回想が繰り返し描写される。

(12) ラッシェンはこのことをアリアーネに指摘される。(F 133)

(13) 高橋和巳は、『輝ける闇』における性描写の質が作品を通して変化しないことを、語り手自身の変化のなさの証左として指摘している。参照:「開高健著『輝ける闇』」(『人間として4』) P.287。開高の分身である語り手は、対象化された〈体験〉を言語表現に定着させようとする強い意思の反面、その主体としての自身の変化を拒んでいるのだ。このことは「敗戦体験」の特権化の問題と関係している。真継伸彦は『輝ける闇』の数ページに渡る敗戦前後の回想場面の最後に置かれた「私には何事も起こりそうにない」(K 210) という記述を挙げ、「これは、敗戦体験というものが自分にとってもっとも強烈な体験だったから、以後なにがあっても、もはや敗戦体験以上のものはないという主人公の存在証明と私には読めた」と述べ、その姿勢を批判している。同 P.298。

(14) 一般的文脈で言うと、サイゴンでの主人公の飽くなき性生活は、兵士のステレオタイプをなぞるものである。戦場での過酷な生活と、休暇における放蕩の対比である。その意味では、このような性愛描写は、この日本人作家が兵士たちと一定のリアリティを共有していることを強調している。従軍経

験のある新聞記者が披露する、旧日本軍の兵隊が女性の陰毛を、特に売春婦のそれをお守りにしたというエピソード（K 183）もまた、この文脈において解釈されるべきだろう。すなわち、この作品に描かれる戦場、あるいは主人公の生きる主観的世界において、女性はなによりもまず性的欲望の対象として単純化された上で生（あるいは生還）の象徴となるのである。

(15) 家族の存在への言及は、全編を通して、新聞記者との会話における語り手の「妻子持ち」であるとの発言（K 87）と、正月に届いた年賀状と荷物についての記述（K 137）の二箇所のみである。

(16) 親交のあった向井敏は、開高の結婚生活を不本意なものだったのではないかと推測しているが、どのような事情があったにせよ、開高が一方で徹底して旅に生き（すなわち妻子のもとに居つくことなく）、他方でその家庭を少なくとも形式的に維持し続けたことは事実である。参照：向井敏『開高健、青春の闇』（文芸春秋、一九九二年）P.80-86。

(17) この事情は『夏の闇』でも変わらない。主人公作家の家庭については、「女」についての記述のなかで「私と結婚できないことの絶望」（N 333）という表現でほのめかされる以外にはまったく語られない。

(18) トーガにはチャンという兄がおり、日本の新聞記者たちのもとで取材の助手をしている。この兄妹の両親は北にいるらしく、事実上の孤児として暮らしてきたふたりはきわめて貧しい（K 79-80）。南ベトナム軍から召集令状を受け取ったチャンは、手の指を二本、自分で切り落とす。この自傷による痛みと発熱に苦しむ彼を語り手は見舞い、薬を差し入れる。徴兵忌避のためではない。指がなくとも徴兵される。インテリである自分が北の捕虜になった場合の拷問を恐れていたチャンは、戦意がなかったことの証明のためにそうしたのだ。この経緯は本作の主要エピソードのひとつだが、語り手の行動や思考がこの事件によって劇的に変化することはない（K 112-128）。

(19) 柴田翔もトーガについて「一人の女であると同時にベトナム全体を背負っている」と指摘している。参照：「開高健著『輝ける闇』」（『人間として4』）P.297。

(20) 晩年の小説作品『珠玉』にも、「見る」ための手段として「女」あるいは性行為が機能する構図が見られる。参照：『珠玉』P.373。『輝ける闇』の主人公の従軍もまたなにか特別なものを「見る」ための手段としての性格を持つ。作品内で前線での体験とバランスを取るべき位置を占める愛人との交渉もまた、作品全体を規定するものとしての〈ベトナム体験〉の主要構成要素として、非日常的認識を指向する語り手の目的意識の延長上にあると言える。

(21) この間の「女」の変容についての記述は詳しく執拗である。（N 497, 501, 506, 509, 511-513）

(22) 「いまの私は、いわば、下腹が柔らかくなっている。美食と好色と役立たずの内省でぐにゃぐにゃになっている。ひとりごとの重さだけでも自身の足で自身の体がはこべないまでになっているのだ。」（N 507）「いまの私には平和が梅毒である。」（N 508）

(23) 彼は満たされることがあってはならず、空虚なままでいなければならないのだ。「女」は以下のように指摘する。「あなたの必然は飢えていたのよ。カードが一枚足りない、足りない、といいつづけていたのよ。それで私と寝てみたり、（…）いろいろしたんだけど、どうしても埋まらないのよ。（…）女どころか、あなたは自分すら愛してないのよ。だから危険をおかしちゃうの。空虚な冒険家なのよ。自分の空虚を埋めるためなら何でもするし、どこへでもいく。」（N 499）

(24) だが、そのような予防措置にもかかわらず、やがて「いつのまにか女は貝が貝殻を分泌するように主婦になって」しまい、語り手は「命名できない憂鬱」を感じることになる。（N 476）

(25) これら開高作品に見られるような狭義での性描写は『捏造』には一切見られないが、これもまた性行為自体の物語における位置づけを反映している。

(26) 前回のレバノン滞在の際も、ホフマンはひとりの現地女性と懇意にしていたが、ラッシェンの同席のもとで、彼女の顔を殴っている（F 27）。この記述に続いて、今回の滞在初日の夜、ホフマンがホテルのバーでまた女性を口説いている様子が描かれるが、ラッシェンは先に引き上げながら、ホフマンが女性を部屋へ連れ帰ろうとしていることを推測する。（F 28-29）

(27) たとえば、ベイルートのホテルに到着し、部屋に入るなり、彼は妻への手紙を書き始め、日頃は話せずにいることを伝えようとする。（F 18-20）

(28) 「誰かの味方をするには誰かを殺す覚悟をしなければならない。（…）残忍な光景ばかりが私の眼に入る。それを残忍と感じるのは私が当事者ではないからだ。当事者なら死体が乗りこえられよう。私は殺しもせず、殺されもしない。（…）私は狭い狭い薄明の地帯に佇む視姦者だ。」（K 92）戦場における「見る者」と「当事者」とが、殺し殺されることの有無によって隔てられるという認識は、『捏造』の主人公の行動が暗示する構図に通じている。また、「当事者」と「非当事者」のへだたりの大きさの認識と、「当事者であるかのようなみぶり」の拒絶は、『夏の闇』でもあらためて言及される（N 500）。

(29) 少なくとも『夏の闇』においては、戦争における「当事者」

性は、民族的帰属に由来する強制を背景にしている必要があると考えられている。「日本人の戦争であってほしかった。国家の強制や命令や要請であってほしかった。憎悪や絶望に根があってほしかった。」(N.517) ただし、開高のこれら二作品における「当事者」化願望の背景には、明らかに、主人公の少年時代への郷愁がある。当時の彼には生きていることの強い実感があった。記憶の中の戦後の風景を集中的に描写したあと、語り手は「あの広大で苛烈な爽快はふたたび味わえない」と嘆じ (K.204-210)、また、焼跡に似た荒涼たる地雷原を眺めながら「恍惚と活力を感じ」さえする (K.230)。そのような感覚への渇望を含む郷愁は、「日本人」同胞一般が否応なく巻き込まれるものとしての戦争をあえて待望するほどまでに強いのである。実際、少年時代には彼もまた「命令があれば歯でも磨くように爆死する決心でいた」のだ (K.206)。

(30) 開高はベトナムからの帰国の直後に書いた『ベトナム戦記』の執筆状況に不満を持っており、「ノンフィクション」ではない形でのベトナム体験の結実を意図して『輝ける闇』を書いたという。参照:「開高健著『輝ける闇』」(『人間として4』) P.293。この作品はまさにジャーナリズム的なる題材への文学的アプローチの自覚的試みなのである。その意味では、この開高の例もまた、非「捏造」的なる体験定着をジャーナリズムの批判的な乗り越えとしての〈文学〉的表現によって実現しようとするボルンの例に通じるものを持つと言える。ただし、「非当事者」として現場に立つことの意味を、あえて「視姦者」としての個人的な後ろめたさに限定しようとするかのような『輝ける闇』の語り手の態度は見逃せない。いいだももは、作者開高がベトナム滞在から三年を経て本作を執筆しているにも係わらず、彼のベトナム体験の「非当事者」性の問題に対する姿勢に深化が見られない点を不満とし、「著者は、歴史がこの三年間に私たちに突きつけるにいたった挑戦を、文学化するのに失敗しました」と批判している。参照:いいだもも「歴史的挑戦の文学化に失敗。開高健『輝ける闇』」(『朝日ジャーナル』1968.6.2.) P.70。一九八二年に行われた対談で、開高は史上初めて「テレビで見る」戦争となったベトナム戦争において、視聴者は「現場で見たという錯覚」と「イマジネーション」の機能不全に陥ったと述べている。少なくともこの時点での開高は、この戦争に取材した自作に、当時の一般的情報環境の問題への対応としての性格を見ていると言える。参照:開高健・山崎正和:対談「原石と宝石」(『国文学:解釈と教材の研究』27 (15)、一九八二年十一月) P.28。

(31) 『捏造』における「捏造」の概念と本作の文学論的側面の詳細については拙論参照:杵渕博樹:「捏造」を巡る闘争と

しての書く行為—ニコラス・ボルン『捏造』(『ワセダ・ブレッター第十八号』二〇一一年三月)

(32) 特に『輝ける闇』については、高橋和巳が双方における描写の質的な差を指摘している。参照:「開高健著『輝ける闇』」(『人間として4』) P.286。

第四十四号 (平成二十年三月二十五日) 目次

「ロシア人形の歌」をめぐって……伊東 一郎
—— 山田耕筰・北原白秋・山本鼎のロシア
大正期のネクロフィリア……川瀬 武夫
—— 萩原朔太郎とエドガー・ポー
吉増剛造「*The Other Voice*」におけるエミリー・ディキンスン
……堀内 正規
室生犀星『香爐を盗む』……塩田 勉
—— イメジャリ分析による文体論的接近
漱石ロンドン演劇鑑賞 (八) ……武田 勝彦
ヴァージニア・ウルフ『オーランドー』前半部における
アーサー・ウェイリー訳『源氏物語』の投影…緑川真知子
—— 小説と芸術論の融合 ——
『クオーレ』、ガリバルディ、ムッソリーニ……尾崎有紀子
—— 近代日本の児童書におけるイタリアの英雄像 ——
明治末「生」の萌芽……成谷麻理子
—— 相馬御風の観照と実行
Deux lectures de Manet — Bataille et Foucault
……Hiroshi Yoshida
翻訳と解釈の狭間で……スピアーズ・スコット
—— 古典和歌翻訳の問題について ——
《研究余滴》
アンリ・ジルマルシェックスの演奏会詳細追補…小林 茂
《書評と紹介》
小沼純一著『魅せられた身体——旅する音楽家コリン・
マクフィーとその時代』……都甲 幸治